

覚鑊の『舍利供養式』をめぐつて

赤塚 祐道

はじめに

覚鑊（一〇九五—一一四三）の撰述とされる舍利講式の一つに『舍利供養式』がある。この『舍利供養式』をめぐつては、すでに頼瑠（一二二六—一三〇四）が『真俗雜記問答抄』（以下『真俗雜記』）において写本の相違を指摘しているように早くから問題となっていた。しかしこの違いは『興教大師全集』（以下「全集本」）には反映されていない。よってこれまで頼瑠が指摘する写本の相違とはいかなるものか知られていなかった。そうした中、金剛寺（大阪府河内長野市）において全集本とは異なる『舍利供養式』を見る機会を得、この写本によって頼瑠が指摘した問題点を具体的に確認することができた。結論からいえば、全集本は後人の意楽によって書き改められている可能性があるということである。本論ではこれらの問題点を考えてみる。

一 頼瑠の指摘

頼瑠は『真俗雜記』「密嚴院舍利講式事」において、問、何。答、教王院口傳云、第二段ニ願ニ都率ヲ、第四段ニ講ニ寶篋印經ヲ式ハ、密嚴院御草本ナリ矣。第二段ニ或ハ願ニ密嚴淨土ヲ、或ハ願ニ極樂ヲ、第四段講ニ大日經ヲ、或講ニ率塔婆ヲ。是レ後人隨ニ意樂ニ書改矣。但シ率塔婆十德ノ釋ハ、又聖人製作ノ別書也。此ヲ入講式ニ事ハ、後人ノ意樂也。

と問題点を取り上げている。すなわち第二段に都率を願ひ、第四段に宝篋印經を講ずる式は覚鑊の御草本であり、第二段に密嚴淨土あるいは極樂を願ひ、第四段に塔婆を講ずるのは後人の意楽としている。しかし、現今の『興教大師全集』では「第二 供ニ養シテ舍利ニ願レ生セント極樂ニ」とし「第四 称ニ揚ジテ塔婆ヲ助ニ所修ノ行ヲ」としている。すなわち『真俗雜記』の問答によれば全集本では後人の意楽を採用していることになる。第二段について頼瑠は「都率」と「極樂」の別があるとしながらも、全集本では「極樂」のみの記載しかない。こ

覺鑊の『舍利供養式』をめぐって（赤塚）

これは全集編纂時に都率を記載する写本を対校していないことにつながる。また第四段について頼瑠は「塔婆」と「宝篋印經」を講ずる別があるというが、全集では「塔婆」を表に書き、「宝篋印經」を裏書きとしている。頼瑠が引いた教王院の口伝を全集からは読み取れず、頼瑠がどの系統の『舍利供養式』について述べているかはこれまで不明であった。

二 第二段について——極楽か都率か——

頼瑠が『真俗雜記』で引いた教王院の口伝によれば「極楽」と「都率」の別があるというが全集本に反映されていない。全集編纂の過程に「都率」を記載する写本がなかったためと思われるが、それまでに全集として刊行された小林正盛編『興教大師全集』や江戸時代に覺鑊の著作を集めた『密嚴諸秘釈』を見ても「極楽」の記載のみである。ほかに『興教大師覺鑊写本集成』には寛永三年（一六二六）の醍醐三宝院本が収録されているがこれも全集と同系統の写本である。

『真俗雜記』には「極楽」と「都率」の二本があると述べられており、我宝（？——一三一七）の『舍利供養式鈔』には極楽の文を引いて解釈し、あわせて都率についても釈している。そのことから頼瑠、我宝の時代には二系統の『舍利供養式』があったことは確かであるといえる。なお明応三年（二四九四）の金剛三昧院本⁽²⁾は極楽の文を書写し都率の異本注

記がされているので、「極楽」と「都率」の二系統の写本が流布していたことは確かであろう。

三 正平十八年禪惠書写本について

国際仏教学大学院大学によって進められている金剛寺（大阪府河内長野市）の聖教調査により金剛寺から二本の『舍利供養式』の存在が確認された。一つは金剛寺第十三代学頭禪惠（一二八四——一三六四）によって正平十八年（一三六三）に書写されたもの⁽³⁾（以下「金剛寺本」）、もう一つは江戸時代の写本で正平十八年本を書写したと思われるものである⁽⁴⁾。全集では延文五年（一三六〇）の大覚寺本を底本として、康安元年（二三六一）の東寺観智院本、鎌倉時代の宝菩提院本をもって対校されており、正平十八年（一三六三）の金剛寺本もこれらと並ぶ価値を有する写本と位置づけてよいものである。そこで金剛寺本の第二段を見ると次のように書かれてある。

第二ニ供養シテ舍利願ト生シコト都率一者、今此ノ釋迦大師者、法身性佛之應化、秘主密王之親教也。爲ニ弘ニ密藏ヲ、暫ク現シ第三重ニ、欲テ濟ニハント顯機ヲ、權リニ説リ百億部ヲ。三乘五乘各謂ニ我教主、尋實尋源唯是眞言ノ佛也。坐ニ白蓮ニ以告ニ本地ノ淨妙ヲ、列ニ烏瑟ニ以示ニ果德幽玄ヲ、良有ル以也。一代利物之應跡皆是ニ三密加持之妙業。八相成道之化儀、莫シ非ニ六大法身之智用ニ。緣謝即滅之尊形、遺化既ニ有恃。機興即生之舍利、當益誰カ作サム疑ヲ。況ヤ復タ、金剛之幻ハ、即シテ事ニ而眞ナリ。不二之一ハ即シテ如ニ而多ナリ。一子ノ慈悲、

三世ニ無休^{コト}。秘密曼荼瑜伽自在。是ヲ以テ攝シテ威儀ヲ歸シ平等ニ、分テ一體成ル多身ト。舍利ノ實義秘趣在リ斯レニ。金剛弟子等、前身ニ植^テ何ナル善苗^ヲ、今世ニ奉ツル遇^ヒ此ノ福田^ニ。靜ニ思^フ是ノ理^ヲ、感涙潤ス袖^ヲ。捨^テ身命^ヲ、投珍財^ヲ、誠尤可シ競ヒ供養ス。是ノ故ニ、調ヘテ六種之微供^ヲ志^ス三金之舍利^ニ。以此功德^ヲ廻^ス向都率^ニ、必遂^ニ上生之素懷^ヲ、速ニ滿^シ下化之弘願^ヲ。能仁慈尊佛體無^シ異ナルコト。天鼓彌勒智行惟^レ同シ。抑此ノ天者^ハ、若就^カ淺略^ニ者、應化等流之淨刹、若シ依深秘^ニ者淨妙法身之佛土也。能居ノ慈尊稱之毘盧遮那。所住定足天豈非法身淨土。密印所標秘趣可知、内院非外密意深察名假一處實遍十方發願欲生此心彼天雖云法土易往過化。雖云^ト天界易生超人^ニ。是レ則彼尊之本誓、此ノ教ノ神力。樂大之所致信深^ク之使爾而已。四身上土盡在此ノ天。三根ノ行者棄之何欣^{ハント}。高祖既住、末資盍^ツ願。是ノ在大衆三業^ニ運^テ志^ヲ供養^シ舍利^ヲ、可欣^ハ上生^ニ。頌曰。我今所獻諸供具 一一諸塵皆實相 實相周遍法界海 法界即是諸妙供 供養舍利四法身 三世常恆普供養 我佛法界加持力 上生都率入阿字

南無大覺牟尼尊金剛舍利上生都率 三遍

傍線部は全集本と異なる箇所である。弥勒都率淨土を意識した段落となっており、頼瑜がいう都率を願う式と考えられる。頼瑜は『真俗雜記』⁽⁵⁾のほか『薄草子口決』⁽⁶⁾、『秘鈔問答』⁽⁷⁾、『胎藏入理鈔』⁽⁸⁾に「密嚴院式云」あるいは「伝法院本願釈云」として「能居ノ慈尊号^ニ之ヲ毘盧遮那^ト。所住知足豈非^ニ法身ノ淨土^ニ。密印所^レ標^{スル}秘趣可^レ知^云」^云と一文を引いており、金剛寺本の一文と合致することから頼瑜は都率を願う『舍利供養式』を見ていたことがわかる。すなわち頼瑜が『真俗雜記』

覚鑊の『舍利供養式』をめぐって(赤塚)

で取り上げた都率を願う式とは、金剛寺本の系統の『舍利供養式』を指す。頼瑜はこの系統を覚鑊御草本としたのである。

四 我宝『舍利供養式鈔』による見解

槇尾西明寺を中興した自性上人我宝(？―一三二七)の『舍利供養式鈔』は覚鑊の『舍利供養式』の注釈書である。本文を抜き出し、そこに注を加える形式をとっている所以我宝がどの系統を底本としていたかがわかる。

供^ニ養^{シテ}舍利^ヲ往^ニ生安養都率^ニ者、此ノ講式^ニ有^ニ都率極樂ノ異本^ニ共^ニ本願ノ制作^{ナリト}云。或ハ者都率ハ本願ノ釋、極樂ハ本願弟子ノ囉覺⁽⁹⁾所^{ナリト}作^ル云。然^{トモ}或^ル書^ノ中^ニハ以^テ極樂ノ詞^ヲ引^ク本願ノ釋^ト。仍^テ兩本共^ニ密嚴院ノ作^{ナリト}可^レ知。

第二段の本文引用は極樂の文を引いているが、その解釈をめぐっては二説を載せており両本とも覚鑊の作とする説、あるいは都率は覚鑊の作、極樂は耀覺房信恵(生没年不明)が作ったものという説もあるが、両本とも覚鑊の作と我宝は見えていた。頼瑜同様に都率・極樂の二本が存在していたと判断できる。我宝の解釈は両本覚鑊の作とするものであった。

五 道範『秘密念仏鈔』による見解

第二段は都率を説くのか、それとも極樂を説くのかということについて、頼瑜あるいは我宝の引用より考えてみたが、

覺鑊の『舍利供養式』をめぐつて（赤塚）

全集本が極楽を採用しているように極楽を説くということも考えなければならぬ。道範（一一七八—一二五二）の『秘密念仏鈔』にも『舍利供養式』からの引用を見ることが出来る。

覺鑊ノ云々。若シ就カハ淺略ニ者、他受應化之淨刹。若シ依ラハ深秘ニ者、自性法身ノ佛土也。名ハ假ニ西方ニ實ハ遍ニ法界ニ。發シテ願ヲ欲セハ生セント此ノ心彼ノ刹。九品ノ蓮臺ハ、則チ開ニ性徳ノ心連ニ、無量ノ莊嚴ハ、則チ顯ニ恆沙ノ己有ニ。^一

これは明らかに極楽を説く段の引用であり都率に関する記述は認められない。覺鑊滅後間もない時期に道範が引用した『舍利供養式』に都率が説かれていないのは、「都率」とする説への問題を示すものである。

六 第四段について——塔婆か宝篋印經か——

もう一つ問題となるのが第四段をめぐつて「称揚塔婆助所修行」（塔婆）とするのか「講真言經助所修行」（宝篋印經）とするかについて『真俗雜記』によれば、

第四段講ニ大日經ヲ、或講ニ率塔婆ヲ。是レ後人隨ニ意樂ニ書改矣。但シ率塔婆十徳ノ釋ハ、又聖人製作ノ別書也。此ヲ入ニ講式ニ事ハ、後人意樂也。

と述べられており、塔婆を説くのは後人の意樂であり、宝篋印經を説く式は密嚴院の御草本であるという。全集では「講真言經助所修行」を裏書きとしているが、これは大覺寺本に

よるものであり、『密嚴諸秘釈』、金剛三昧院本、醍醐三寶院本では宝篋印經を説く段を第四段に、そして第五段の後に第四段を再録する形で「称揚塔婆助所修行」を載せている。また金剛寺本には宝篋印經の段のみを載せ塔婆に関して書かれていない。我宝の『舍利供養式鈔』は宝篋印經を解説する。すなわち第四段に塔婆を説くのか宝篋印經を説くのかという区別があるわけだが、『真俗雜記』によれば塔婆を説くのは後人の意樂であるので本来は宝篋印經を説くということになる。覺鑊の他の著作と比較した場合、塔婆書代を説く式は『卒塔婆十徳』と重複していることから、これは後人によって入れられた文と考えられている。

七 勸請句について

勸請は表白に続いて書かれるもので、全集をはじめ多くの写本・版本にはこの句が省かれている。全集に「略之」とあるので略したのかもしれない。この勸請句については金剛寺本と金剛三昧院本に同様の記載が見られ、我宝の『舍利供養式鈔』にもこの解釈がされている。このことから考えると勸請句は本来存在していたものが省略されて写され全集にも採用されたと考えられる。金剛寺本や金剛三昧院本、あるいは我宝が採用していることからすると、あるべき勸請句が全集本に書かれていないということは問題である。金剛寺本に勸

請句が省かれずに写されている。全集本において不明であった部分がこれらの写本によって明らかとなった。

おわりに

以上、『舍利供養式』について『真俗雜記』に書かれる問題を、全集本と金剛寺本とを比較して考えてみた。まず金剛寺本は、頼諭が述べる覚鑑御草の『舍利供養式』と位置づけられる写本であり全集に反映されていない新出の資料と位置づけられる。金剛寺本の系統を異本注記する金剛三昧院本も貴重な写本といえる。

第二段については、道範の引用から考えれば極楽とする見方もできようが、我宝や頼諭の解釈から考えると都率と極楽を説くものが鎌倉末には広まっていたと考えられる。

第四段をめぐつては二種の別があるとしながらもこれを併記する写本も存在している。

これら二段と四段のみが決まった形で入れ替わり、頼諭の頃には問題となっていた。なお『多聞天講式』においても同様に極楽の箇所⁽¹⁰⁾に都率の注が存在していることから、弥勒都率浄土と阿弥陀極楽浄土が常に対比して考えられていた。

結論としては頼諭は二種の『舍利供養式』を見ており、自らの著作には「都率」を引く式を用いていた。いずれが正しいという判断は難しいが、頼諭は教王院口伝にいう「密嚴院

御草本」を専ら使用していたことは確かである。ただ「極楽」である可能性、あるいは両本とも覚鑑の作とする解釈もありこれを判断することは難しい。覚鑑の時代は浄土教が広まりつつあったので極楽を説くということも理解できるが、覚鑑の『五輪九字秘釈』において「安養都率同仏遊処」とあることから考えると両本が存在することも理解できよう。

- 1 『真言宗全書』第三七卷三二七頁上。
- 2 高野山大学附属図書館所寄託（図書番号 普84・金・12）。
- 3 金剛寺聖教3函198番。37函66番。
- 4 金剛寺聖教21函75番。
- 5 『真言宗全書』第三七卷二九七下。
- 6 『大正蔵』第七九卷二四五頁下。
- 7 『大正蔵』第七九卷四五七頁下。
- 8 『大正蔵』第七九卷一七二頁上。
- 9 『増補真言宗安心全書』卷下二五二頁。
- 10 『興教大師覚鑑写本集成』第四卷二六一頁。

〈キーワード〉 覚鑑、講式、舍利信仰

（国際仏教学大学院大学日本古写経研究所
特任研究員・博士（文学））